

血管診療技師取得とこれからの課題

宇陀市立病院 中村知世

近年、血管疾患への関心が高まっている。その理由としては、わが国の疾病構造の変化すなわち人口の高齢化と生活習慣病の増加に伴い、血管疾患が著しく増加してきたためである。増悪を来すと全身の動脈が侵される生活習慣病にとって、動脈硬化の早期発見・治療は最も重要であり、動脈の「病変の観察」や「治療経過の観察」に種々の血管検査法が応用されるようになった。

また、時に致命的となる「エコノミークラス症候群」や周術期血栓症とも関連する「静脈血栓症（肺塞栓症、深部静脈血栓症）」や QOL を低下させる下肢静脈瘤などの静脈疾患も近年注目されており、種々の血管検査法が応用されている。

では、その種々の血管検査法にはどのようなものがあるのか？

血管疾患の検査には「形態診断」と「機能診断」があり、前者では画像診断が、後者では生理機能検査が用いられる。また、検査の際には「どんな血管疾患があるか」（表1）、疾患の「診断の決め手」「治療指針」を理解した上で検査を行うことが診断への近道である（表2）。

このような時代背景や臨床サイドからの要求の高まりにより、血管疾患の検査や治療に関わることのできるコメディカルの専門家として日本血管外科学会、日本脈管学会、日本静脈学会の3学会が「血管診療技師（Clinical Vascular Technologist：以下 CVT）」の認定を始めることになった。

CVTの受験資格は、①臨床検査技師・看護師・臨床工学士・診療放射線技師・准看護師のいずれかの資格を有している者、②血管疾患を専門とする医師のもとで血管疾患診療の経験がある者、③所定の講習会を受講した者にある。

今回は、この血管診療技師についてもう少し詳しく、

また当院での活動の様子を紹介する。

表1 どんな血管疾患があるか？

	拡張性	閉塞性
動脈疾患	動脈瘤	縮窄症、Leriche 脳卒中、頸動脈狭窄 虚血性心疾患 腹部・腎動脈狭窄 末梢動脈閉塞症
静脈疾患	静脈瘤	SVC・IVC 症候群 深部静脈血栓症
リンパ管疾患		リンパ浮腫

表2 血管疾患を診断するには？

外来診察
既往歴、現病歴、身体所見（視診、触診、聴診、血圧など） 血液検査（生化学、凝固系検査）
検査（外来）
脈波法、サーモグラフィー、近赤外分光法 レーザードプラー、経皮酸素分圧、トレッドミル 超音波検査、CT、MRI
検査（入院）
造影検査（静脈、動脈）、圧測定、血管内超音波 血管内視鏡